

OMF セイズ・オザワ 松本フェス 30周年の夏

3年ぶり開催 13日開幕

「新しい風」運営委員に若手

参加者減少・高齢化 転機のボランティア

するのがボランティア。来てよかつたと思つてもらえるように迎えたい」と張り切る。赤津さんは「仕事との両立に一抹の不安があるけれど、まずはやってみる」と言う。

OMFコンチエルトの前身は、サイトウ・キネン・フェスティバル(SKF) 松本のボランティア協会。協会時代から、ボランティアがチケットのもぎりや観客の案内などを担ってきた。

熊井さんは「お客さまがフェスティバルに来て最初に接するのがボランティア。来てよかつたと思つてもらえるように迎えたい」と張り切る。赤津さんは「仕事との両立に一抹の不安があるけれど、まずはやってみる」と言う。

カー松本山雅FCのホーム戦や信州・まつもと大歌舞伎」もボランティアが運営を支える。青山さんは「OMFを契



ボランティア向けの研修会場で、参加者の検温をする赤津さん(右)＝7月30日、松本市

機に市民が自立的に取り組むボランティア像が広がった」と感じている。

SKF松本の初回から30周年を迎えるOMF。新型コロナウイルスの影響もあり、ボランティアの活動は転機に差しかかっている。今年の登録者数は約200人と、新型コロナウイルス流行前の2019年より約100人少ない。副代表の仁田晃司さん(62)安曇野市IIによると、この30年で高齢化も進み、平均年齢は60歳前後。新型コロナウイルス流行前から「参加人数は右肩下がり感覚」(仁田さん)で、新規登録者や若手の呼び込みが課題だった。

そこで運営委員に加わってもらおうと声をかけたのが、以前からボランティアに参加していた熊井さんと赤津さんだった。仁田さんは「限られた世代だけでは考え方や行動

の幅が狭まる。運営委員に入ってもらい、組織に新しい風を取り入れたい」と話す。2人は「運営の役に立ちたい」と快諾。仕事以外で地域に関わることで視野が広がり、何かにのめり込む楽しさも得たという。

今年から、参加者がボランティアの楽しさを共有する場をつくらうと、通信アプリ「LINE(ライン)」で活動の写真や文章を投稿する試みも始めた。研修会では、熊井さんと赤津さんが活動時の服装やチケットの確認方法などの説明を聞く参加者の様子を撮影。熊井さんらは研修会後、「活動が始まります。みんな盛り上げましょう」と投稿し、参加者から「気が引き締まる思い」「モチベーションが上がった」などと返信があった。

熊井さんは、ボランティアの集合写真を撮ることも提案している。「活動の証があればモチベーション向上につながるのではないかと